

## 日本に見る文化継承のカギ

チャンディンズイ

ベトナム人は、子どもの頃から日本についてのイメージを持っている。なぜなら、ベトナムの子どもたちは『ドラえもん』や『ワンピース』や『君の名は』のような日本の漫画、あるいはアニメを見るのが好きだからだ。もちろん、私も例外ではない。子どもの頃から、アニメから日本の文化を学んでいる。例えば、『カードキャプターさくら』というアニメに描かれた東京の浅草寺は、とても美しかった。浅草寺の雷門の前で桜の花が舞うシーンを見て、「きれいだなあ」と日本の伝統文化に感動したことは今でも忘れられない。また、最近、『天気の子』という映画を見る機会があった。『天気の子』の多くの美しいシーンを通して、新海誠監督は日本の現代的な都市である東京を世界に紹介した。東京に何度も行ったことがある私は、『天気の子』を見ると友達との思い出が目の前に出現したように感じられた。そのとき、私はふと「なぜ日本人は現代社会に住みながら、日本の伝統文化が守れるのか。」と疑問に思った。私は三年程日本に住んでいるが、その間、山梨と神戸で生活し、東京にもときどき出かける機会があった。そこで、この疑問について、自分の経験から考えてみることにした。

実は、日本に来て最初の頃は、日本での生活があまり良いとは思えなかった。日本語ができなくてたくさん困ったこともあったので、日本人と話すことが非常に恥ずかしかったのだ。しかし、山梨に一年半住んでいる間に、その気持ちはすっかり消えてしまった。そのうち私は、「山梨から来たズイです。」という自己紹介をするようになった。「えっ山梨の出身ですか。嘘でしょ。」と言われることもあったが、私にとっては、山梨が日本での自分の故郷に違いないと思うぐらい、日本の、山梨の生活が好きになったのだ。東京と比べると、山梨は穏やかだ。私が住んでいたアパートからは、富士山がよく見えた。日本語学校の先生から、富士山は「信仰の対象と芸術の源泉」の世界遺産なのだと教えてもらった。留学生である自分が、一年中富士山が見られるというのは、本当に贅沢な経験だと思った。きれいな河口湖と雄大な富士山を見ると心が洗われるようで、日本人が大事にしている価値の一部が分かったような気がした。

そんな山梨の生活で、特に印象に残っていることがある。甲府の小中学生との交流会に参加したときのことだ。その交流会では小中学生と一緒に茶道を体験したり、「ほうとう」という山梨名物の伝統料理の作り方を教えてもらったりした。そこで驚いたのは、日本の小中学生が、茶道のやり方やほうとうの作り方をよく知っていたということだ。小中学生は、学校で先生に習ったと言っていた。子どもが伝統文化を学校で習い、それを留学生である私に伝えてくれているということに、私は感激した。

山梨から東京までは二時間ぐらいで、あまり遠くないので、山梨に住んでいる間、たまに東京を訪れた。初めて東京を訪れたときには、銀座や渋谷の高層ビルに圧倒されたが、その現代的な街の中に、伝統的な建物が存在していることもまた印象的だった。

浅草寺を訪れたときには、『カードキャプターさくら』で見たそのままの景色が目の前にあった。そして、少し離れた隅田川の川岸から浅草寺を見ると、すぐ近くにスカイツリーが簡単に見つけられる。スカイツリーに入ると、江戸時代の『東都三ツ股の図』という浮世絵がある。江戸時代に東京スカイツリーの建設が予言されたということが説明しており、非常に驚いた。確かに、江戸時代から予言されていてもおかしくないぐらい、浅草寺とスカイツリーは違和感がなく両立しているように思える。伝統的な浅草寺と現代的な東京スカイツリーという二つの東京の象徴が一緒に存在するということは、伝統文化の価値を守りながら現代的な価値を作り出している日本人の思考と精神に強く影響を与えているのではないかと思った。

山梨県で一年半日本語を勉強した後、神戸学院大学に入学した。神戸市に住むことを決めたのは、日本の文化だけではなく、多様な国の異文化が体験できる国際環境があるからだ。

神戸で印象的なのは、「ルミナリエ」というイベントだ。平成七年から毎年、阪神淡路大震災の被災者を慰霊するために行われている有名なイベントだ。しかし、神戸に来たばかりのとき、私はルミナリエのことを知らなかった。あるとき、日本人の友達がルミナリエに行こうと誘ってくれたのだが、私は「えっ？ルミナリエって何？」と聞き返して、当惑した。彼も私の質問に驚いて、「マジで！ルミナリエ知らないの？」と言った。「そうなんだよ。山梨出身だから。」と私は言った。彼はルミナリエのことを詳しく説明してくれて、それから一緒にルミナリエに行った。神戸の人々にとって、ルミナリエは被災者を慰霊するという意味だけではなく、今の現代的な街、神戸を復興するために、神戸の人々がどのように努力してきたかを伝えているのだそうだ。ルミナリエの意味が分かったうえで、輝くライトを見ていたら、涙が出そうなほど感動した。

ルミナリエに行ったことがある人は、『しあわせ運べるように』という曲を聞いたことがあるだろう。この歌は大震災が起きた年に復興を願うために生まれたもので、毎年ルミナリエの時期に小学校の合唱団に歌われる曲になった。歌のメロディーを聞くと、その時に神戸の人々がどのように傷ついたのかが強く感じられる。ルミナリエは、震災の後に生まれた神戸の人々だけではなく、私のような外国人にも過去の出来事と人々の思いを伝えてくれるイベントなのだ。

山梨、東京、神戸。三つの場所での経験を振り返ってみると、「なぜ日本人は現代社会に住みながら、日本の伝統文化が守れるのか。」という疑問に対する答えが見えてきた。日本人は、後世に伝統文化や過去の出来事を伝えていくことに価値を見出しているのだ。そのように考えて、改めて日本とベトナムを比べると、三つの違いに気がついた。

一つ目は、日本の子どもたちは、学校で日本の伝統文化について教えてもらっていて、そうした伝統文化を守ることが必要だと認識しているということだ。山梨で、小中学生と共に日本の文化を体験した時、外国人の目から見ても、教える先生の熱心さが伝わってきた。先生を通じて、子どもたちは文化を尊重するということを学んでいくのではないだろうか。ベトナムの子どもたちもベトナムの文化について勉強しているが、その文化を守ろうという

意識はあまり持っていないように感じる。

二つ目に、日本では、伝統文化と現代文化の組み合わせを見つけるのが難しくないということだ。首都の東京であっても、現代的な街並みの中に、伝統的な建物や景色を見ることができる。ベトナムでは、都市化のスピードが速すぎたので、都市の中に伝統文化のシンボルのようなものが次第になくなってきたと思う。

三つ目は、様々な方法で外国人に日本の出来事を伝えていることだ。震災を記憶し、復興の歩みを後世に伝えるという意味をルミナリエというイベントに込めることによって、そのイベントに集まる外国人に広く震災を伝えることに成功している。一方、ベトナムはどうだろうか。ベトナムの高校生は、日本の俳句をよく知っている。日本の有名な景色も知っている。しかし、日本人は、ベトナムのことをどのぐらい知っているだろうか。フォー以外には、ベトナムについてあまり知らない人が多いのではないだろうか。

ベトナムには、フォーだけではなく、おいしい食べ物がたくさんある。例えば、私の好きな料理はコムタムだ。ホーチミン市は私の故郷で、ベトナムの経済の中心として活気のあるところだ。そして、それだけではなく、コムタムが有名な街だ。コムタムとは砕いた米を炊いた南部の名物料理で、焼肉や目玉焼きなど、様々なおかずをのせて食べるものだ。私は「なぜ日本人はフォーをよく知っているのに、こんなに美味しいコムタムを全く知らないのか。」ということを感じた。ベトナムは、なぜ日本のように外国人に文化や出来事を伝えていけないのだろうと思った。しかし、「知らないなら、自分が伝えればいいのだ」ということに気がついた。

三年日本に住んでいる間、ベトナムの文化や料理や観光地などについて紹介する機会があった。これは私にとって名誉なことだった。ある日、私の父が酔っぱらって私に電話をかけてきた。父は、息子の様子について聞かずに、「ズイ君、愛国心があるかないか。」と聞いた。「もちろんあるよ。なぜそんなことを聞くの。」と私は驚いて答えた。すると「いや別に。もう一つ。愛国心を表すためにどんなことをした？ズイ君？」と父が聞いたので、「最近大学で日本人の友達にベトナムの飲食物について発表したよ。また、日本語の授業でもベトナムの観光地を中国人の友達に紹介した。私が住んでいる国際交流会館でも、外国人留学生にベトナムの文化を紹介したよ。お父さん、どう？」と私は自信を持って答えた。父は「よく分かった。ズイ君、私はとても誇りに思う。」と言った。私はとても満ち足りた気持ちになった。

このとき私が満足した理由は、父の褒め言葉があったからではなく、自分の文化を伝えることができたからだ。私は今、日本に留学しているベトナム人だからこそ、自国の文化や出来事を多くの人に伝えていくことが自分の義務ではないかと考えている。そう考えるようになったのは、日本へ留学して「文化継承のカギ」を学んだからだ。

もちろん、「自国」というのは、私にとって、ベトナムだけでなく、日本も含まれている。私は、両方の国の文化を伝えていきたいと思っているのだ。なぜなら、私はベトナムのホーチミン出身であると同時に、日本の山梨出身でもあるからだ。